

# 「おにぎりプログラム」を通した子どもに対する親の意識変化と保育者の気付き

愛知教育大学大学院 教育学研究科  
発達教育科学専攻 幼児教育領域 寺澤 達也

## 1章 問題の所在と目的

### 1. 保育所保育指針における子育て支援の位置づけ

平成 29 年(2017) 年の改定における保育所保育指針の要点において「子育て支援の充実」が挙げられている。この改定では、保護者と連携して「子どもの育ち」を支えることを基本として、保育所が行う子育て支援の役割について記載されており、第 4 章においては、保護者が子どもの成長に気付き、子育ての喜びを感じるように努めることが保育所の特性として位置付けられている。現場での子育て支援で重視すべき点は、保護者と共に子どもの育ちを喜び合うことであり、親の養育力の向上のためには、子どもの成長に対する親自身の喜びの蓄積と、親が子育ての中で行っている努力や工夫に着目し、保育者が親を支援していくことが大切だと言える。

### 2. 個を伸長する保育実践

日常的な保育においてはクラス単位での保育が最も活用されており、かかわり方によっては個より集団が優先される印象を感じさせることがある。日名子太郎は、「個性」を伸長するような「個」を重視した保育を考えることが大切であるとしている。また、保育の中で、個への働きかけをどのように取り入れるかが研究されるべきとも述べている<sup>1)</sup>。本来、子どもは、それぞれの個性が十分に発揮される必要があり、子どもが自分の思いが尊重されている実感を持つことや、活動の中での充実感から新たな意欲の高まりを感じる事が大切である。さらに子ども一人ひとりが受容感及び充実感を得るためには、保育者が、子どもと個々に直接的に向き合う時間を取ることが必要だと考えられる。

### 3. 日常の保育活動による子育て支援

保育者は日常的な何気ない会話や連絡帳等のやりとりの行為の中で、子どもの発達状態を伝えたり、子どもに対する保育技術を生かして、行動の見本（着衣の手助け

等) や子どもの気持ちを読み取った上での言葉かけの仕方等をそれとなく親に伝えている。このような目立たない支援が、親の養育力を支えていると考えられる。これらは、保育者の専門性に根ざした、保育者独自の保護者支援である。しかし、このような意義ある行為も、日常的なものであるために自己の行為の意図を意識できず、各保育者の経験則と主観に基づいた支援の域を出ないことも事実である。保育者が保護者支援をおこなう際には、独自の専門性を持つ者として、何を意識してどのような支援の仕方を選択するのかが自覚する事が必要である。しかし、現在における子育て支援に関連する研究は、連絡帳、クラスたより、送迎時における対話、保育活動への参加等が主な対象であり、日常の保育実践活動を保護者支援の観点から分析する研究は見られない。そこで、筆者は、日常の保育活動の中で保育者が行う子育て支援の具体的な方法の 1 つとして、少人数の集団でおにぎりを握って食べるというおにぎりプログラムを設定した。おにぎりプログラムの具体的な内容は図 1 の通りである。

### 4. 研究の目的

本研究では、おにぎりプログラムの実施に伴う子どもから親への感情の表出や情報の共有が、親の子どもに対する捉え方を変え、親子関係に変化をもたらす可能性を検証し、おにぎりプログラムにおける子育て支援に資する有用性を明らかにする。また、保育者が、クラス集団内とおにぎりプログラム内での子どもの様子を比較検討することを通して、子どもに対する理解が深化する過程を明らかにし、本プログラムが有する保育者教育としての可能性を示す。

## 2章 「おにぎりプログラム」を通した子どもの反応と親の捉え方

**目的:** おにぎりプログラムの実施に伴う、子どもの反応と親の捉え方について明らかにする。

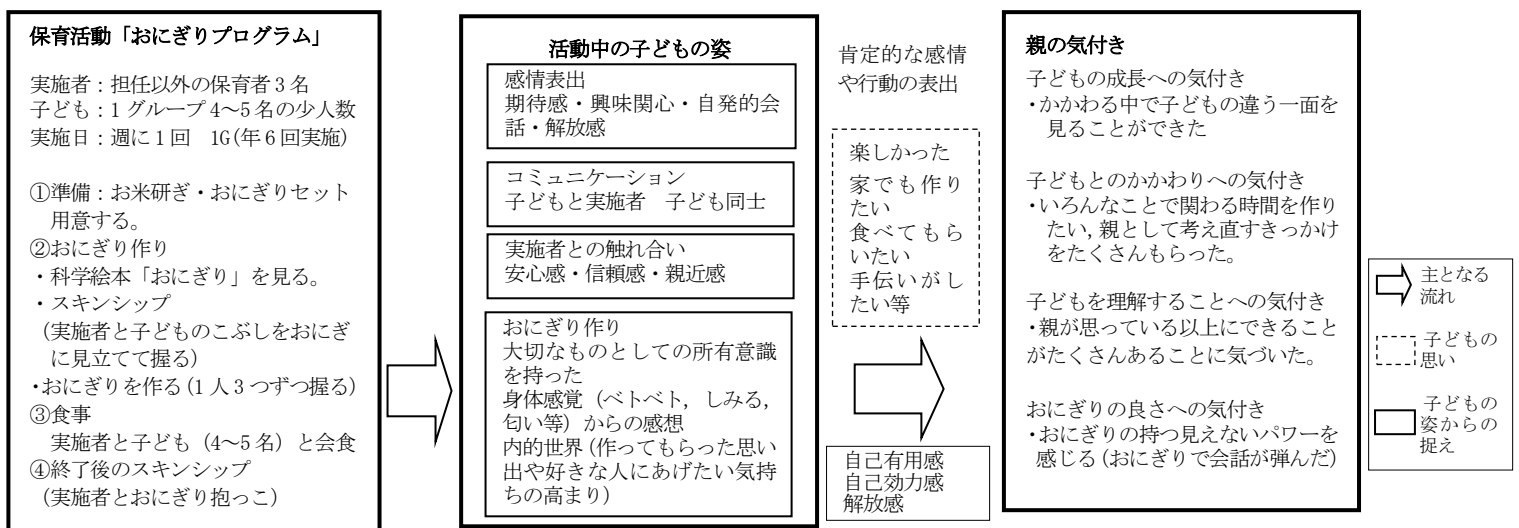


図 1 「おにぎりプログラム」における子どもの感情表出に伴う親の気付きのプロセス

**方法:** 対象者: 私立保育園に通う 2017 年度 5 歳児クラス男児 14 名, 女児 16 名計 30 名 (2017 年度おにぎりプログラム参加児) の保護者 (母: 24 名, 父: 4 名, 祖母: 1 名, 叔母: 1 名) と, 2018 年度 5 歳児クラス男児 17 名, 女児 17 名計 34 名 (2018 年度おにぎりプログラム参加児) の保護者 (母: 32 名, 父: 1 名, 祖母: 1 名) 期間及び内容: 2017 年度おにぎりプログラム終了後の 2018 年 1 月～2 月及び 2018 年度おにぎりプログラム終了後の 2019 年 1 月～2 月に計 64 名の保護者を対象として自由記述を明記したアンケート用紙を配布し分析した。回収率は 100% である。

**結果と考察:** プログラム実施後, 「楽しかった」「家でもやりたい」等, 子どもから直接的に感想が話され, 親自身も「家でもやりたい」「話をたくさん聞いてみたい」等の受け止めがあり, 家庭内におけるコミュニケーションを活性化させる役割を担う可能性が示唆された。また, おにぎりプログラムを通して誰かに話したい, 作って見せたい等の思いが子どもの言動, 行動として表出され, 親の考え方と気づきに変化を与えたものと推測された。また, おにぎりプログラムによる子どもから親への感情の表出に関わる記述内容を分析した結果, 成長, かかわり, 意欲, 活動の独自性の 4 つの分類項目が得られた。おにぎりプログラムの実施に伴い, 親が子どもの意欲や積極的な姿等, 新たな一面を知り得たことが, 子どもの理解を深化させ, 子どもの成長や子どもとのかかわりに対しての喜びや気づきを促すものとなった。おにぎりプログラムは, 家庭生活において身近なおにぎり作りを媒介とし, 子どもの感情や成長等を親が理解して受容しながらかかわることが可能であるため, 家庭内のコミュニケーションを支える機能を有することが考えられた。また, 日々の保育活動での保育者との共感的で受容的なかかわりが, 子どもの肯定的な感情を生み, 親子の対話を促し, 親子

のかかわりの契機となり得ることが示唆され, 家庭の養育力を視野に入れた子育て支援の新たな方向性を見出すことができたと思われる。これより, おにぎりプログラムを, 親と子をつなぐ保育活動の一つとして実施することの意義が示唆された。

### 3 章 子どもへの親のかかわりの変化ー「おにぎりプログラム」を通じた子どもに対する親の意識の変容過程ー

**目的:** おにぎりプログラムにおける子どもから親への感情の表出を通じた親の意識の変容を検証し, おにぎりプログラムが子育て支援に資する有用性を明らかにする。

**方法:** 対象者: 私立保育園に通う 2018 年度 5 歳児の保護者 (30 代～40 代の母親) 13 名。期間: 2019 年 3 月。面接方法: クラス集団とおにぎりプログラムでの子どもの印象及びイメージを評定するためにイメージ調査票における項目内容を用いて, イメージに差異が大きかった子どもの親を抽出した上で調査協力の依頼を行い, 承諾を得られた保護者を対象に半構造化面接を実施した。面接は, 落ち着いた雰囲気の中で安心して実施できるよう, 園内の相談室を使用した。倫理的配慮: 本研究は, 愛知教育大学の研究倫理規定に基づき実施された。インタビュー開始時には, 研究目的を口頭及び書面で説明し, 発話内容の IC レコーダーによる音声記録・筆記記録, および研究への使用についても承諾を得た。分析方法: 得られたデータを M-GTA を用いて, 質的分析をした。その分析によって作成された概念をもとに子どもに対する親の意識の変容過程について考察する。

**結果と考察:** M-GTA の分析の結果, 親の意識の変容として, 15 の概念と 4 つのカテゴリーが抽出された。以下, 4 つのカテゴリーについてそれぞれに説明する (図 2)。

#### 1. おにぎりプログラムの独自性 (第 1 カテゴリー・コアカテゴリー)

おにぎりが日常的な食べ物で馴染み深く, 形にこだわ

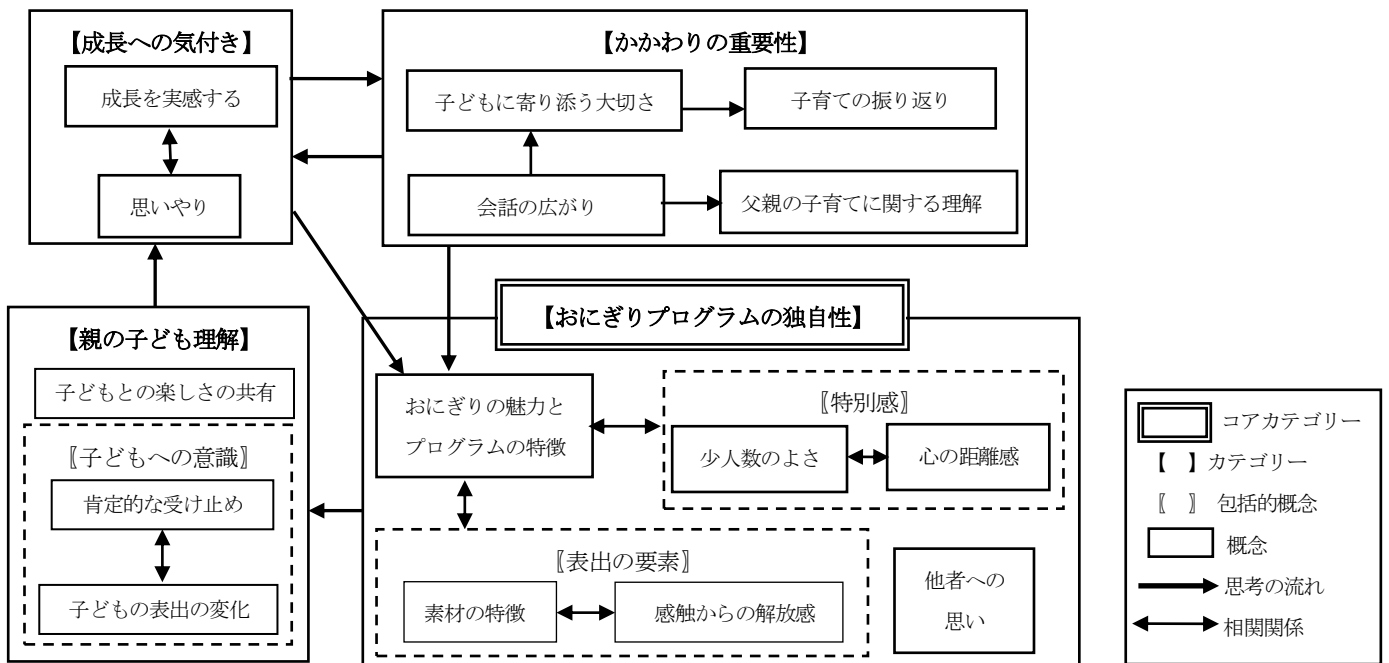


図 2 親の意識の変容過程の枠組み (結果図)

らず自分の思う形に作ることができ、食べる楽しみに繋がるという特徴が子どもの肯定的な表出を導き出していると考えられる。また、炊き立てのご飯を握ることや実施者がおにぎりに見立てて子どもの拳を握ることにより、物や人から身体に伝わる体温や感触を感じられる。つまり、平井久世（2010）が「他者との触れ合いの中で、体温や感触を感じるにより、自分の存在を確かめていく」<sup>2)</sup>と述べているように、実施者の手に触れることで緊張や不安が和らぎ、安心感を得ると考えられる。

また、少人数での活動の為、一人ひとりとじっくりかかわり、応答できたことが、子どもの喜びや意欲を引き出すものとなったことに気付く。そして、親は、子どもが担任でない実施者をニックネームで呼ぶことにより親近感がわき、実施者と近い関係を築くことができていることを感じる。親は、おにぎりの感触、環境設定、保育者の存在等のおにぎりプログラムにおける独自性が、子どもの肯定的な感情の表出を促し、親子のコミュニケーションの契機となることを実感した。

## 2. 親の子ども理解（第2 カテゴリー）

親は、おにぎりプログラム実施後、子どもの「おにぎりを作りたい」という意欲的な言動や進んで食事の準備をするなどの積極的な行動の表れに気付く。つまり、親はおにぎりプログラムの実施後に変化が出たことを通して、普段とは違う子どもの表出の変化に気付いていることが分かる。また、親が子どもの表出そのものを肯定的に受け止める行為は、子どもの存在を認めることに繋がり、子どもの表出と親の受け止めの相互作用によって子どもの理解をより深化させ、子どもとかかわることの大切さを再確認する契機となった。

## 3. 成長への気付き（第3 カテゴリー）

親は、子どもがおにぎりプログラムの感想を具体的に話をしたり、自分の感じた気持ちを伝えられる姿やプログラム実施前に、爪を切る等の身なり等を意識している姿から成長を感じることができた。その表れから子どもを褒めたり、話を聞くという親子のコミュニケーションが促進された。また、「大好きなお母さんやお父さんために作りたい」という相手を思う気持ちや人の役に立ちたいという他者への思いやりの気持ちが育っていることに喜びを感じていることが伺えた。この成長への気付きは、単に喜びだけを感じさせるものではなく、親自身の子どもに対するかかわりを改めて見直す契機となった。

## 4. かかわりの重要性（第4 カテゴリー）

親は、おにぎりプログラムを契機とした家庭でのおにぎり作りを通して、日常生活では見られない子どもの新たな一面を発見することができた。それと共に子どもと共有する時間が増え、子どもとかかわりを大切に思う意識が高まった。また、子どもとおにぎりを作ることは、母親だけに留まらず、父親と接するきっかけとなり、かかわりの広がりを見せた。父親は、子どもと過ごす中で、子どもに対するかかわりの楽しさと大切さに気付き、そ

れを夫婦で共有しながら子どもの理解を深めていった。さらに子どもとかかわる父親の肯定的な表情や態度が母親への気持ちに変化を促したことが分かった。親は、子どもとかかわりを通して、子どもの気持ちを捉え、その感情を共にすることで子どもと向き合うことができたことが分かった。

本章において、主に次の2点が示された。第1に、親は、おにぎりプログラムにおける子どもの肯定的な感情の表出から、子どもの新たな気付きと成長への喜びを感じる等、子どもの捉え方の変化が明らかになった。また、子どもの表出そのものを受け止める行為は、子どもの存在を認めることに繋がり、子どもの表出と親の受け止めの相互作用が子どもの理解をより深化させ、子どもとかかわることの大切さを再確認する契機となった。第2に、おにぎりの感触やおにぎりプログラムが有する環境設定、保育者の存在、保育形態などの独自性によって得られた、「楽しかった、また作りたい、〇〇できた」等の充実感や効力感が子どもの言動や行動に変化を与え、子どもの肯定的な感情の表出を促した。それにより、おにぎりプログラムが家庭における親子のコミュニケーションをとるきっかけの一つとなり、親の意識の変容に影響を与えることが示唆された。

## 4 章 子どもの表れから見る保育者の気付き—保育者のフォーカス・グループ・インタビューから—

**目的:** 3章では、おにぎりプログラムにおける体験を子どもから聞いた親が、自身の子どもに対する捉え方を変容させたことが明かになった。そこで、4章では、おにぎりプログラムでの子どもの様子を保育者が見ることによって生じる、保育者自身の子どもに対する捉え方の変化を明らかにする。そして、おにぎりプログラムにおける保育者の専門性の向上に資する有用性を検討する。

**方法:** 対象者：おにぎりプログラムの担当保育者2名と年長児担任2名、期間及び内容：2019年3月、分析方法：第3章で使用したイメージ調査票の数値の差が大きい幼児を選定し、おにぎりプログラム中の子どもの録画映像を基にフォーカスグループインタビュー（FGI）を実施した。FGIとは、特定の主題に関連して、具体的経験をしている複数の調査対象者に対して実施される面接技法であり、比較的短時間で、多くの具体的な情報を得られるという利点を有している（Vaughn, S, Schumm, J. S, & Sinagub, J 1999）<sup>3)</sup>。プログラム実施者である筆者が、ファシリテーターとなり、主題であるおにぎりプログラムでの子どもの姿を見て気付いたことを自由に語ってもらった。FGIによって得られた録音データから逐語録を作成し、本章の目的に関連する内容を抽出し、ラベルを付与した。付与したラベルをもとに、4つのカテゴリーに置き換え、2つの側面から内容の類似性に基づき、カテゴリー命名を行った（表1）。カテゴリー生成後は、各カテゴリーにおける具体的な発言を簡潔に文章化し、カテゴリー間

の関係を捉えられたところで、保育者の気付きとの関係を概念図として作成した。倫理的配慮:3章と同様である。

**表1 保育者のフォーカスグループインタビューによる気付きの視点**

側面1 子どもの姿からの気付き	
カテゴリー1 クラス集団との表れの違いからの気付き	発言 ・おにぎりプログラムの方が自分を発揮できていた。 ・反応が良く、声が出ている。
カテゴリー2 子どもに変化を及ぼすおにぎりプログラムへの気付き	発言 ・話をじっくり聞いてあげることができる特別感がある。 ・先生を意識しない呼び方が仲間意識を高める。
側面2 子どもの姿から考える保育者のあり方と今後の保育活動	
カテゴリー3 保育者として大切なこと	発言 ・子どもの話を聞くことが大切。 ・職員で共有し、振り返ることが大切。
カテゴリー4 今後の保育課題	発言 ・個を大切に保育を考える。 ・子どもとじっくりかかわる保育が大切。

**結果と考察：**保育者は、プログラム中の子どもの様子と普段の保育中の様子の違いに気付き、おにぎりプログラムが子どもにとって特別な場として機能しているために新たな一面が表出したことについて言及していた。集団生活を主とする保育の中では、保育者は無意識に「〇〇君は行動が早い子だ」、「〇〇ちゃんはリーダー的存在である」と、主観的に子どもを分類して理解したつもりになっている可能性が考えられる。そして、主観的な理解を基にその子に適していると思う対応を行うこともあり得るのではないだろうか。保育者は、プログラムにおいて見せる子どもの姿と、自分が把握しているその子の姿の違いを目の当たりにすることで、子どもの思いに真摯に向き合うことの大切さと、子どもの言動や行為の意味を理解したつもりにならずに多角的に解釈することの必要性に気付いた。次に、自身の保育と子どもを理解する姿勢を振り返り、省察することの意義が示された。保育者は、おにぎりプログラムでの子どもの様子を見ることで自身の子どもへのかかわり方を客観化でき、保育中に気付かなかったことや無意識にしていたことに改めて気付いた。これらの気付きは、保育者による話し合いによ

って得られたものであるが、担任を含めた複数の保育者で一人の子どもに対する理解を深めたことが、客観的な省察を促したと考えられる。FGIを通して、保育者は自身の保育を振り返り、子ども一人ひとりが自己発揮できる保育環境の大切さや、個に応じるために必要な保育者の意識について課題を見出すことができた。保育活動における子どもの表れや成長は、クラス集団の中の育ち合いによって育まれる部分も多いが、一人ひとりの良さを伸長するためには、個の育ちを意識した保育を行うことが大切になると考えられる。

## 5章 総合考察

本研究では、まず、保育活動としてのおにぎりプログラムの実施に伴う子どもの感情等の表出が、親の子どもに対する関わりに及ぼす影響を明らかにした。おにぎりプログラムをきっかけとして、親が子どもと共有する時間を作ることで、子どもの気持ちや成長に対する気付きが促された。以上の過程をモデル化したものが図3である。おにぎりプログラムはクラス担任ではない保育者が、少人数で行う活動である。そのため、子どもの欲求や思いを的確に把握しながら直接的に関わることが可能である。これらのかかわりを通して充実感や満足感を得た子どもも多くは、活動に対する肯定的な思いを家庭内で話しており、そのことは親子のコミュニケーションを生じさせ、親の子育てに対する意識を変化させた。これは、おにぎりプログラムが、間接的な子育て支援として機能し得ることを意味する。

次に、保育者の専門性を高めることが明らかになった。保育者は、ビデオを通して自身の子どもへの捉え方やかわり等を省察することで、子どもの理解のあり方を見つめ直すきっかけとなった。これは、おにぎりプログラムが保育者の専門性を向上させる機能を有する可能性を示唆すると考えられる。以上の結果を踏まえた上で残された課題は以下の2点である。1つ目は、おにぎりプログラムの機能を明確にするために4歳児から継続して実施し、親の子育てに対する意識の変容過程を明らかにすることである。2つ目は、FGIによる語り合いから得られた

知見を保育現場に還元し、保育者の専門性の向上に必要な知識を高めることである。今後は、本研究で得られた結果を基に、おにぎりプログラムを日常の保育活動として位置づけることが肝要である。

### 引用文献・参考文献

- 1) 日名子太郎(1966) 個性の成長と幼稚園, 個性の成長における施設保育の影響について, 幼児の教育 65巻7号 p11.
- 2) 平井久世(2010) 粘土製作における「触れる」ことについての一考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要. 第56号. pp. 279 - 291
- 3) Vaughn, S, Schumm, J.S, & Sinagub, J(1999) グループインタビューの技法, (井上理, 監訳, 田部井潤・柴原宣幸, 訳). 東京慶應義塾大学出版会

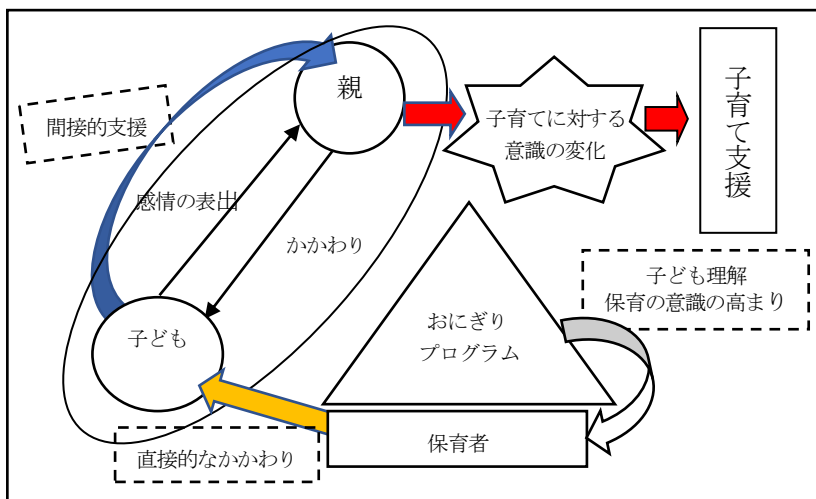


図3 おにぎりプログラムからつながる子育て支援の構想図